

〈研究ノート〉

地域の健康づくりリーダー養成による大学・地域連携強化の取り組み

中 川 康 江・田 中 響・土 居 裕美子・近 田 敬 子

Yasue NAKAGAWA, Hibiki TANAKA, Yumiko DOI, Keiko CHIKATA :
Initiatives of the Cooperation with College and Local Communities
Through Health Leaders Training

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第76号 抜刷

2018年1月

〈研究ノート〉

地域の健康づくりリーダー養成による大学・地域連携強化の取り組み

中川 康江¹・田中 響¹・土居 裕美子¹・近田 敬子¹

Yasue NAKAGAWA, Hibiki TANAKA, Yumiko DOI, Keiko CHIKATA :
Initiatives of the Cooperation with College and Local Communities
Through Health Leaders Training

鳥取看護大学では、地域の健康支援・活性化を目指し、「まちの保健室」を実践している。また、その他の取り組みとして、地域住民を対象とした健康づくりリーダーの人材育成を目的とした養成講座を実施している。平成27年度から29年8月現在、全7期生74名を養成し、修了生の継続活動支援策として、教育人材バンクも立ち上げている。本研究は、修了生の持続的な活動のための課題を模索することを目的として、修了生の声と現状の分析・検討を行った。

キーワード：地域 知識・技術の向上 フォローアップ研修 健康づくりリーダー養成
「まめんなかえ師範塾」

はじめに

本学は、「地域とともに発展する存在」になって欲しい、という地域のニーズにより開学し、「地域の発展に貢献する人材の育成」を建学の精神としている。このため、本学では、大学教員による地域貢献を支援する委員会として、「地域貢献委員会」を設置している。地域貢献委員会では建学の精神に則り、「地域とともに歩むこと」を目指し、開学時より地域社会への貢献活動の柱として、「まちの保健室」活動を行っている。「まちの保健室」を通して、地域貢献とは何か、その方法と実施はどうするのかを考え、実施後の評価に取り組んでいる。教職員は、年間70回以上「まちの保健室」の開催を行うことで、「まちの保健室」の活動の場づくりと機能の明確化に取り組み、HP、県看護協会などへの広報活動に努めてきた。また文部科学省のCOC+(地(知)の

拠点大学による地方創生推進)事業として、自治体やマスコミからも経済的・広報的協力も得られ、当初の目的としていた全県下での活動の展開も具体性を帯びてきた。それに伴い、「まちの保健室」の内容や質の維持・向上が、今後の課題となってきている。

「まちの保健室」を継続・定着させていくためには、地域住民の主体的取り組みが機能していくことが必要であると考えた。そのために、「健康づくりを行うリーダーやボランティアの方々を育成し、地域の中でいつでもだれでも、『元気にやっているか』と声をかけあえる関係づくり」をめざした。鳥取県中部地域では、元気にやっているか、という意味で「まめんなかえ」という言葉を用いる。そこで、「まめんなかえ」と声を掛け合う元気なまちづくりを目指す、地域の健康づくりリーダーの人材養成講座を「まめんなかえ師範塾」と名付け、その開講を計画した。

本稿では、今後の大学と地域の連携強化につなげるため、講座終了後のアンケート結果と修了生の活動の経過を通して見えてきた効果と課題を分析した。

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

1. 方法

1) 研究対象者

研究対象者は、「まめんなかえ師範塾」修了生（第1期生～7期生）74名のうち、本調査に同意の得られた55名を調査対象とした。

2) データ収集方法

養成講座の終了直後に、アンケートの趣旨を説明のうえ、無記名自記式調査表を配付し、同意をいただけた方のみ記入、提出をいただいた。後日郵送で送って来られた方もあるが、全て無記名で一括保管したのちデータ処理を行い、個人の特特定が行えないようにした。データは結果を可視化するため、1. とでも役立つから5. 役立たない、の5段階で収集した。収集したデータは、質的帰納的手法を用い、内容分析を行った。データはパスワードをかけて専用のUSBメモリに保存し、紙媒体とともに鍵のかかる保管場所で研究代表者が責任をもって厳重に管理した。保管期間終了後（研究終了後5年間保管）、電子媒体は速やかにデータを削除、紙媒体はシュレッダーにより裁断して廃棄する。

3) 対象者への倫理的配慮

対象者には、研究の趣旨、研究参加への任意性、プライバシーの保護、研究への協力を辞退した場合にも不利益が生じないことを文書と口頭で説明した。また、アンケートの目的は、「後輩の養成」と、「今後の地域の健康づくりに役立てる」ためであるが、そのために地域貢献に関連する機関などへ報告の可能性があること、利益相反がないこと等についても、文書と口頭で説明した。研究の主旨に賛同した対象者からは、書面で同意書に署名を得た。またアンケート用紙は無記名であるため、個人の特特定はできないが、同時にアンケートの協力の撤回もできないことも説明した。

4) アンケート内容

「この研修は役立つものであったか」、「この研修は地域の健康づくりに役立つものであったか」、「今

後、どのような研修を希望されるか」、「これから師範塾修了生として、活動をしていきたいと考えておられるか」の項目について5件法で尋ね、各項目に自由記載欄を設け、その内容を検討した。

2. 結果

アンケート回収率は、 $n = 55$ 、74.3%であった。

修了生の数は、平成27年度には中部地区で1回開講し、1期生20名が終了した。平成28年度は、「まめんなかえ師範塾」を中部、東部、西部、中部の順に4回開講した。平成29年度は、8月末現在、2回開催した。各期生の現状を表1に示す。平成29年8月現在の全修了生は74名となった。人材バンク登録者数も74名であった。修了生の平均年齢は60.6歳で、有職率は50.9%であった。

修了生の「まちの保健室」活動への参加数を図1に示す（以下、「まちの保健室」にボランティアとして参加したことを「活動」と記す）。H28年7月スタートから現在まで活動された方の総数は30名224回であった。平成27年度修了生（1期生）の一人当たりの活動参加数は9.4回であった。平成28

表1 まめんなかえ師範塾修了生の現状

所属期 (修了 時期)	修了 者数 (名)	アンケー ト回答者 数(名)(%)	人材バン ク登録者 数(名)(%)	平均 年齢 (歳)	有職 率 (%)	参加 回数 (平均)
1期 (H27.3)	20	16 (80)	20 (100)	/	/	187 (9.35)
2期 (H28.8)	11	6 (54.5)	11 (100)	55.5	63.6	10 (0.91)
3期 (H28.9)	10	10 (100)	10 (100)	61.9	40.0	5 (0.5)
4期 (H28.10)	5	5 (100)	5 (100)	58.6	40.0	2 (0.4)
5期 (H29.3)	20	10 (50)	20 (100)	60.9	55.0	20 (1.05)
6期 (H29.8)	3	3 (100)	3 (100)	62.0	66.7	0
7期 (H29.8)	5	5 (100)	5 (100)	64.6	40.0	0
全体	74	55 (100)	74 (100)	60.6	50.9	6.2 (0.72)

修了者合計74名（H29.8.23現在）

1 から 5 期生別一人当たり活動参加回数
(平均)

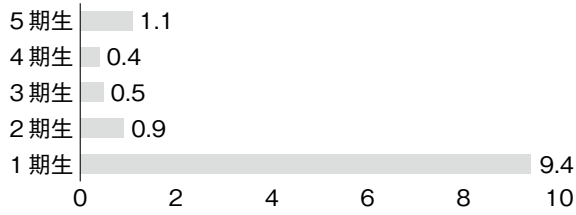


図1 1 から 5 期生別一人当たり活動参加回数

表2 研修終了後の修了生の声

所属	I	II	III	自由記載の修了生の声 (人数)
1期	1.1	1.4	1.5	・レベルアップ研修の希望 (7) ・取り組みを広げたい (3) ・地域の健康寿命を延ばすことの大切さ (2) ・もっと習熟したい (2)
2期	1.2	1.3	1.5	・出来る範囲でお手伝いできれば (2) ・地域活性につながるといい (2)
3期	1.2	1.3	1.5	・まちの保健室が理解できた (4) ・自分の健康状態が分かる (2) ・時間があれば参加したい ・積極的に参加したい
4期	1	1.2	1.4	・仕事との兼ね合いが付けば参加したい (3) ・出会いがあった (2) ・健康意識の向上
5期	1.5	1.7	1.4	・知識・技術の向上 (10) ・今後も研修希望 (7) ・ボランティア参加したい (6) ・地域の方との協力 (5) ・リーダーとして自覚
6・7期	1.1	1.1	1.6	・参加していきたい (5) ・自分の体調管理が分かった (3) ・老人についての研修希望 ・先輩との交流の場となった

(I. 研修は役立ったか、II. 地域の健康づくりに役立ったか: 1 とても役立つ, 5 役立たない III. 今後の活動に参加したいか: 1 積極的にしたい, 5 出来ればしたくない)

年度修了生 (2 から 5 期生) の一人当たりの活動参加数は 0.6 回であった。

修了生の人材養成講座終了時の声を表2に示す。終了後の修了生の声では、「研修が役立ったか」という点でも、「研修が地域の健康に役立ったか」という点でも得点差はなかった。自由記載の声には、「地域」、「もっと習熟したい」、「取り組みを広げたい」、「レベルアップ研修の希望」、「ボランティア参加したい」、「知識・技術の向上」、「今後も研修希望」、

「自分の健康状態が分かる」、「自分の体調管理が分かった」、「交流の場となった」という声がかかれた。

3. 考察

今回、大学と地域連携の強化を目的とした地域の健康リーダーの人材養成講座、「まめんなかえ師範塾」を終了した修了生の声を分析検討した。

その結果、終了直後の地域貢献に対する意欲は、修了生全員が人材登録を行っていることより、終了直後は意欲が高まることが伺える。

終了後、人材バンクを通して全員にボランティア参加の情報提供を行っているにもかかわらず、ボランティア参加回数は、各期において大きく差が生じている。1期生の参加数が平均で9回を超えている一方、2から4期生は一人当たりの参加数が1回以下にとどまっている。5期生は今回の調査時に終了後半年しか経過していないにもかかわらず、既に一人当たり1回以上の参加数となっていた。終了時に行ったアンケート結果では、「今後活動をしたいか」という点でも、5期生と他期生の差異はない。また、「研修が役立ったか」という点でも、研修が地域の健康づくりに役立ったかという点でも差異はない。また、修了生の平均年齢、有職率も、5期生と他期生の差異はない。アンケートの回収率は5期生が最も低かった。それにもかかわらず5期生が1期生について終了後のボランティア参加数が多かった。

得点では差異はみられなかったが、参加回数の多い1期生と5期生に、自由記載に共通の声を聞くことが出来た。1期生の「地域」「もっと習熟したい」「取り組みを広げたい」「レベルアップ研修の希望」、5期生の「地域」「ボランティア参加したい」「知識・技術の向上」「今後も研修希望」というものであった。

これらの共通する意識の有無が、その後のボランティア参加に影響していることが考えられる。この結果より、今後の養成講座において、「知識・技術の習得感」と、終了後も継続した「学習意欲の刺激」を行うことの重要性が示唆されたといえよう。また、

「地域」という意識を認識してもらうことがその後の活動意欲に影響することも示唆されたといえよう。1期生は、受講時点ですでに健康推進委員など、「まちの保健室」に関連した「地域」での事業を経験、兼任しておられたことが多かったことも、終了後の継続的な活動に繋がった要因とも考えられる。

また、継続的な活動の支援として、平成29年3月に、第1回のフォローアップ研修を開催した。5期生は、人材養成講座を終了した直後に、フォローアップ研修を受講している。このことより、終了後も継続したフォローアップ研修を実施する事も効果があったことが伺える。

このことより、6,7期生には今後ボランティアに参加したいという声が多く聞かれていることは、今後の活動への期待を感じさせる。同時にその意欲を喪失しないように、今後の人材養成講座において、今回の修了生の声を反映させた「フォローアップ研修を継続」すること、さらに講習内容は、「知識・技術の習得感が実感できる内容」が重要と考える。

おわりに

本学の建学精神、「地域の発展に貢献する人材の育成」に則り、今後も地域社会への貢献活動の柱として、「まちの保健室」活動を行っていきたい。「まちの保健室」を通して、「地域とともに歩むこと」

を目指していくために、「まちの保健室」を継続・定着させていかななくてはいけない。そのためには、地域住民の主体的取り組みが機能していくことが必要であり、地域の健康リーダーを養成していくことは、重要と考えている。

その人材養成講座において、今回の調査結果から示唆された今後の課題「フォローアップ研修を継続」すること、講習内容として、「知識・技術の習得感が実感できる内容」をいれることを、実施していきたい。地域貢献活動「まちの保健室」の活性化のために、人材養成講座「まめんなかえ師範塾」の修了生、そして、これからの受講生の持続的な活動のために、調査結果によって示唆された内容を活かしていく必要があると、改めて確認した。

引用・参考文献

- 1) 鳥取看護大学『平成28年度「地域貢献委員会」報告書 鳥取看護大学の地域貢献活動における現状と課題—「まちの保健室」創設に向けた事業報告を通して—』, 鳥取看護大学, 2016.
- 2) 鳥取看護大学『平成28年度「地域貢献活動」報告書 2年目に考える地域とともに歩むこと 鳥取看護大学の2年目の地域貢献活動における現状と課題』, 鳥取看護大学, 2017.